

あ だか い せき  
安 宅 遺 跡

2020年3月

長野県飯田市教育委員会



あ だか い せき  
安 宅 遺 跡

2020年3月

長野県飯田市教育委員会



## 序

私たちの住む飯田市は、木曽山脈（中央アルプス）と赤石山脈（南アルプス）に挟まれた伊那谷の南部に位置し、古くから交通の要所として栄えてきました。また、海拔400mの天竜川河畔から、海拔2000mの木曽山脈、海拔3000mの赤石山脈までの変化に富んだ地形と豊かな自然に恵まれています。そうした自然を生かし、小京都といわれる飯田城下町を中心に、まちの暮らし、里の暮らし、山の暮らしが営まれ、古代から伝わる伝統文化が息づいています。

近年、継続的に実施されている埋蔵文化財包蔵地の発掘調査によって、当地方の原始・古代史が次第に明らかになってきています。そうした結果、当地方における先人たちの活動は古く、3万年以上も前の旧石器時代にさかのぼることがわかつてきました。それ以降、当地方に暮らした人々の足跡を追ってみると、その生活域は現在の私たちが暮らす箇所と重なってくることが多いことも分かってきました。そこからは、人間の営みの継続性を知ることができますが、埋蔵文化財を残していくながら、地域の歴史を知るうえで欠かせない文化財として活用することの難しさも強く感じています。

埋蔵文化財は文字どおり地下に埋もれているため、なかなか身近に感じることが少ないと思います。しかし、埋蔵文化財は私たちの祖先の歩んできた足跡を示しており、当地方の歴史を雄弁に語ることができるものです。

このような文化財は、一度壊してしまうと二度とは元に戻せないため、できる限り現状で保存することが最善といえます。しかし、現代に生きる私たちの暮らしに欠かせない開発事業との間では、発掘調査を実施して記録に残して保存することで後世に伝えることもやむを得ないものです。

今回発掘調査を実施した安宅遺跡は、昭和40年代に発掘調査され、それ以降も何回かの発掘調査が実施されています。その結果、縄文時代中期・弥生時代後期の集落跡や奈良時代の居館跡などが確認されています。今回の調査では、駄野区の区民センター建設に先立ち発掘調査を実施しました。調査の結果は本文で述べられたとおりですが、平安時代の集落の一部などが調査されました。今後、本書が広く活用されるとともに、当地方の皆さんに歴史や文化財がより身近に感じられるように普及活動を行うことが私どもの使命とも考えます。

最後になりましたが、発掘調査・整理作業の実施に当たり際し多大なるご理解とご協力をいただきました関係各位に、深く感謝を申し上げます。

2020年3月

飯田市教育委員会

教育長 代 田 昭 久

## 例　　言

1. 本報告書は、飯田市駄野区が計画する区民センター建設に先立ち発掘調査された飯田市駄野1302番1号ほか所在の埋蔵文化財包蔵地「安宅遺跡」の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は平成23度に現地調査を実施し、令和元年度で整理作業を実施して発掘調査報告書を刊行した。
4. 本調査における発掘調査位置は、飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図の図面の以下に位置する。グリッド設定は飯田市新埋蔵文化財基準メッシュに基づき、有限会社M2クリエーションに委託した。  
LC94 09-08
5. 安宅遺跡の発掘調査及び整理作業には、ADK1302-1 を用いた。遺構には略号として、堅穴建物：SB、掘立柱建物：ST、溝・自然流路：SD、土坑：SK、柱穴・穴：SP、その他：SXを用いた。
6. 土層観察については、小山正忠・竹原秀夫 2005 『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。
7. 遺構図の数字は、検出面からの深さ（単位cm）を示している。
8. 遺構写真は吉川、遺物写真は山下が撮影した。
9. 本書の執筆は現場担当調査員吉川の所見を基に山下が行い、馬場保之・下平博行が総括した。
10. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館で保管している。

# 目 次

## 本 文 目 次

序

例言

第Ⅰ章 経過 .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査の経過 .....	1
(1) 平成23年度 発掘調査 .....	1
(2) 令和元年度 整理作業及び報告書刊行 .....	1
第3節 調査組織 .....	1
(1) 調査 .....	1
(2) 事務局 .....	2
(3) 指導 .....	2
第Ⅱ章 遺跡の環境 .....	3
第1節 自然環境 .....	3
第2節 歴史環境 .....	4
第3節 安宅遺跡の発掘調査 .....	5
第Ⅲ章 調査結果 .....	8
第1節 調査区の設定 .....	8
第2節 基本層序 .....	9
第3節 遺構・遺物 .....	9
(1) 堅穴建物 .....	9
① SB66 .....	9
② SB67 .....	10
③ SB68 .....	10
④ SB69 .....	10
⑤ SB70・71 .....	11
(2) 掘立柱建物 .....	11
① ST11 .....	11
② ST13 .....	12
(3) 溝 .....	12
① SD56 .....	12
② SD57 .....	13
(4) その他 .....	13
① SX08 .....	13

② SX09	13
(5) 柱穴・穴	17
(6) 遺構外出土遺物	17
第Ⅳ章 まとめ	22
第1節 今次調査区の状況	22
(1) 遺構について	22
(2) 遺物について	23
第2節 周辺調査の状況	23
(1) 県道調査区の概要（平成4年度調査）	23
(2) 国道調査区の概要（昭和43年度調査）	23
第3節 安宅遺跡の全体像	25
(1) 弥生時代	25
(2) 古墳時代	25
(3) 奈良時代～平安時代	25
引用・参考文献	26
報告書抄録	35

## 挿図目次

挿図1	遺跡の位置図	6
挿図2	調査位置及び周辺遺跡図	7
挿図3	調査全体図	8
挿図4	基本層序	9
挿図5	SB66	9
挿図6	SB67	10
挿図7	SB68	10
挿図8	SB69	10
挿図9	SB70・71	11
挿図10	ST11・ST13	11
挿図11	SD56・SD57	12
挿図12	SX08・SX09	13
挿図13	柱穴・穴その1	14
挿図14	柱穴・穴その2	15
挿図15	柱穴・穴その3	16
挿図16	SB66出土土器	18
挿図17	SB66・SB67・柱穴・遺構外出土土器	19
挿図18	遺構外出土土器	20
挿図19	SB66・SB68・SB69・遺構外出土石器	21
挿図20	周辺調査位置図	24

## 図版目次

図版1	SB66・70・71（北西から） SB66・70・71（北から） SB67（南から）	27
図版2	SB68（南から） SB69（南から） ST11（南西から）	28
図版3	ST13（南東から） SD56（南東から） SD57（東から）	29
図版4	SX08（南から） SX09（西から） 柱穴・穴（北部 西から）	30
図版5	柱穴・穴（北西から） 柱穴・穴（西から） 柱穴・穴全景（西から）	31
図版6	調査区全景（南から） 調査区全景（北西から）	32
図版7	SB66出土土師器蓋 SB66出土須恵器蓋・杯 SB66・68・69、遺構外出土石器	33



# 第Ⅰ章 経過

## 第1節 調査に至る経過

飯田市駄科区は現在ある公民館が手狭になったことから、飯田市駄科1302-1番地ほかに飯田市の補助金などを活用して平成23年度で新たに区民センターを建設することになった。当該地は埋蔵文化財包蔵地「安宅遺跡」に該当するため、関係機関と協議し、平成22年度で試掘調査を実施して、本調査の可否を判断することとした。試掘調査は平成22年6月1日に実施し、遺構・遺物が確認されて本調査が必要と判断された。そこで、平成23年度で発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

## 第2節 調査の経過

### (1) 平成23年度 発掘調査

建設予定地に平成23年4月26日に重機により調査区の拡張を開始した。検出面の見極めが難しくてローム上面まで下げるこことしたために排土量が多くなり、重機を2台使って掘り下げと運搬を行い、5月2日に表土除去の作業が終了した。5月9日には調査員・作業員による発掘調査を開始し、遺構測量のための基準点も同日に設定した。調査期間中に降雨により現場が水没することが2度ほどあって排水に手間がかかったこともあって、6月3日に現地での発掘調査は終了した。その後、飯田市考古資料館において、図面・写真類の基礎的な整理を行った。

### (2) 令和元年度 整理作業及び報告書刊行

整理作業と発掘調査報告書刊行については令和元年度で実施することとし、飯田市考古資料館で作業を実施した。出土遺物は洗浄・注記・復元を順次実施し、遺物実測作業を行った。遺物実測図などはトレースを行い、遺物図版とした。遺構実測図については遺構別図版などを作成するために第2原図を作成し、トレースを実施して遺構図版とした。遺物の写真撮影及び遺構・遺物について写真図版を作成し、原稿を執筆して本報告書刊行となった。

## 第3節 調査組織

### (1) 調査

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 伊澤 宏爾（平成23年度）

教育長 代田 昭久（令和元年度）

調査担当者 吉川 豊（平成23年度：現地調査担当） 山下 誠一（令和元年度：報告書作成担当）

調査員 馬場 保之 下平 博行 坂井 勇雄 澄谷恵美子 羽生 俊郎

春日 宇光（令和元年度） 佐々木佑里香（令和元年度） 福井 優希（令和元年度）

作業員 今村 文一 関島真由美 竹本 常子 福澤 育子 松本 茎子 宮内真理子

中村地香子 中田 恵 中平 敏子 仲村 信 森藤美智子 森山 律子

吉川 悅子

(2) 事務局

飯田市教育委員会

教育次長 小林 正春（平成23年度）今村 和男（令和元年度）

生涯学習・スポーツ課長 松下 優（平成23年度）

文化財担当課長 馬場 保之（令和元年度）

文化財保護係長 馬場 保之（平成23年度）下平 博行（令和元年度）

文化財保護係 吉川 豊（平成23年度）羽生 俊郎 村山 博則（令和元年度）

春日 宇光（令和元年度）佐々木佑里香（令和元年度）

福井 優希（令和元年度）山下 誠一（令和元年度）

(3) 指導

長野県教育委員会 文化財・生涯学習課

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

飯田市は長野県南部を並走する木曽山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山地にはさまれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。また、平成17年10月1日に上村・南信濃農村の2村と合併し、赤石山脈と伊那山地にはさまれた遠山谷も含まれることとなった。

伊那谷は南北に約100kmと長く、中央には諏訪湖を源とする天竜川が南流し、その両岸には国内でも有数な段丘地形が形成されている。北は諏訪地方や松本平の玄関口の塩尻市、南は天竜川と秋葉街道を介して遠州地方に、西は神坂峠や矢作川伝いに美濃地方・三河地方に通じている。こうしたことから、後二者に係る飯田・下伊那地方は長野県の南の玄関口といえる特徴を備えている。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属する花崗岩・片麻岩である。一方、伊那谷の東、伊那山地と赤石山脈の間の遠山谷には中央構造線が走っており、赤石山脈は三波帯・戸台構造帶・秩父帯・四十万帯で構成される。この秩父帯・四十万帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャートなどの堆積岩は、三峰川・小渋川を通して天竜川まで流れ出て、その河床に広く分布している。こうした石材は、旧石器時代以来石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ出たころから始まる。伊那谷独自の段丘地形は、赤石・木曽の両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものである。この段丘は下伊那の地質解説（下伊那地質誌編纂委員会：1976）によると、高位面・高位段丘・古期扇状地・中位段丘・中期扇状地・低位段丘I・新期扇状地・低位段丘IIの5つに大きく編年されている。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12.8°Cとなり、1月の平均気温は0.8°C、8月の平均気温が25.1°Cと寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示している。一方、降水量をみれば年間約1600mm、梅雨と台風の季節である6・7・9月には200mmを上回り、太平洋岸式気候に属するとともいえる。こうした地理的・気候的条件により、飯田・下伊那地方には、標高の比高差を反映する暖地性から亜高山帯まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帶性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

安宅遺跡の所在する飯田市竜丘地区は、飯田市街地から南に4～8kmに位置し、標高は地区の大半が370～440mと飯田市全体の中では低い。東は天竜川を挟み龍江地区・下久堅地区に、北は毛賀沢川で松尾地区と境を接する。南は久米川により画されて川路地区となり、西は約70mと比較的段差の大きな段丘となって中位段丘上の伊賀良地区と接する。地区的東端を天竜川が南流し、その大部分が鷲羽峠の狭窄部にあたり、その先の時又付近から流れをやや西に変えて、川路地区に連なる広々とした氾濫原を形成する。平坦部は氾濫原を含めて5～6の段丘面で形成されており、低位段丘IIと低位段丘Iと大別できる。段丘崖直下には湿地帯が形成されることが多いが、大半は乾燥した段丘面となる。各段丘面は毛賀沢川・新川・西沢川・駒沢川・臼井川・久米川といった天竜川の支流によって開析され、複雑な小地形を呈している。

## 第2節 歴史環境

竜丘地区は、天竜川の氾濫原と段丘崖を除いてほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地に該当し、ことに当地方で最も多くの古墳が築造されている。安宅遺跡が立地する竜丘地区にかかる歴史環境を、考古学的事実から通観する。

旧石器時代の飯田市は、山本地区の竹佐中原遺跡や石子原遺跡において、後期旧石器時代初頭かそれより遡ると推定される石器群が出土しているのを嚆矢とする。年代は3万年～5万年前と推定されているが、科学的根拠に欠けて異論も存在する。その他の資料は断片的で、旧石器時代の様相は不明な点が多い。旧石器時代の遺跡や遺物については、竜丘地区ではこれまでのところ確認されていない。

縄文時代になると、各所で遺跡が確認されるようになる。開善寺境内遺跡で草創期の土器片が出土し（飯田市教委 2002a）、上の坊遺跡で前期後葉の土坑や土器・石器が断片的ながら確認されており（同 2002b）、縄文人の生活の一端を知ることができる。中期になると、駄科権現堂遺跡（旧宮城遺跡）・前の原遺跡・駄科北平遺跡・城陸遺跡から中葉～後葉の集落跡が調査されており（同 1974a・1975・1976・2003）、段丘上の広範囲に遺跡が広がる。後期・晚期については、後期初頭の駄科権現堂遺跡（旧宮城遺跡）土坑出土の東海地方の影響を受けた土器が注目される。それ以外は具体的な生活の様子を物語る資料はない。

弥生時代になると、前期から中期の遺跡についてはほとんど確認されていないが、他地区の様相からみて、天竜川に近い低位段丘上には該期の遺跡が残されている可能性は高い。後期になると、地区全体の段丘上に遺跡が広がる。安宅遺跡（下伊那考古学会 1969）・小池遺跡・蒜田遺跡・ガンドウ洞遺跡・前林遺跡などから堅穴建物や方形周溝墓が調査され（飯田市教委 1974a・1991a・1975）、集落域の様相を知ることができる。微地形をみると、広範囲の水田可耕地は少ないので、畑作を主体にして稲作を組み合わせた複合的な農業が行われていたと考えられる。また、蒜田遺跡・上の坊遺跡では弥生時代後期～古墳時代の貼石をもつ方形周溝墓が調査されており（同 2002b）、地域的な墓制の特徴を解明する上で注目される遺跡といえる。

古墳時代になると中期中葉から後期にかけて、下位段丘面の座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路地区に前方後円墳をはじめとする古墳が築造される。それに伴い、馬具や馬匹埋葬土坑が多く、集落数も激増する。列島や東アジアを含めた情勢の中で、馬匹生産にかかわって大和政権との深いつながりを持った結果と考えられる。竜丘地区では削平・煙滅したのも含めて142基の古墳が築造されており、飯田市内では最も多く、松尾・座光寺地区とともに古墳が集中する地域である。特に、前方後円墳および帆立貝形古墳が多いことが際立っており、前方後円墳9基、帆立貝古形墳3基がある（同 2007）。中期から後期の堅穴建物が前の原遺跡・ガンドウ洞遺跡・内山遺跡・開善寺境内遺跡から検出されており（同 2002c・1991a・1998・2002a）、古墳築造に係わる集落の一端を知ることができる。

奈良時代から平安時代では、座光寺に所在する恒川遺跡群が伊那郡衙跡であることが長年の調査で確定され、正倉院等については恒川官衙遺跡として国史跡に指定されている（同 2013）。竜丘地区では、安宅遺跡では居宅跡と考えられる遺構が検出され、集落については、駄科北平遺跡・前の原遺跡・小池遺跡・城陸遺跡から8世紀から10世紀の堅穴建物が調査されており（同 1976・2002c・1974a・2003）、その一端を知ることができる。また、7世紀の白鳳期では古瓦などの出土から上川路廃寺、奈良・平安時代には古瓦と瓦塔破片が出土した前林廃寺が存在し、上の坊遺跡から瓦片が出土して廃寺跡

との関連が推測され、宮洞窯跡からは埴仏が採集されている。このことから、新たな権力の象徴としての複数の寺院の建立がなされ、当地区が重要な位置を占めていたことが伺われる（岡田 2004）。さらに、地区西側の比較的大きな段丘を駒沢川が開削した河内ヶ洞・宮洞などの谷には、良質な粘土と燃料・湧水に恵まれ、斜面を利用した穴窯が築かれて須恵器・瓦を焼成した。宮洞古窯跡群には4基、河内ヶ洞窯跡群には3基の須恵器を焼成した窯があり、付近にはほかに馬捨洞窯跡と堤洞瓦窯跡が築かれた（岡田 2005）。

平安時代末期には、古文書に伊賀良庄の名が登場し、地区内の一部がその中に含まれていた。鎌倉時代末期には、鎌倉・京都で禅宗が流行したことを受け、地区内に名刹開善寺が開かれた。創建は建武2（1335）年とも貞和2（1346）年ともいわれる。開善寺は幾度もの衰退と復興を繰り返して現在に至っており、山門及び同寺所蔵の絹本着色八相涅槃図が重要文化財に、木造大鑑禪師坐像が県宝に指定されている。

地区的北部毛賀沢川の南岸の段丘上に鈴岡城があり、南北朝時代に信濃守護職小笠原貞宗の次子宗政により築造された。北側対岸の松尾城とともに小笠原一族の居城であったが、信濃国守護職を松尾小笠原と争って急激に勢力が衰えた。さらに天正10（1582）年織田信長の信濃侵攻により、鈴岡小笠原家は滅亡した。現在は、鈴岡城城跡・松尾城城跡とも県史跡に指定され、城跡公園として整備されて地域住民に親しまれている。また、鈴岡城の段丘下の駄科北平遺跡では中世の堂跡と考えられる遺構が調査され、四耳壺・青磁・山茶碗・内耳土器・和鏡などの遺物が出土しており、鈴岡小笠原氏と深い係わりがあると考えられる（飯田市教委 1976）。

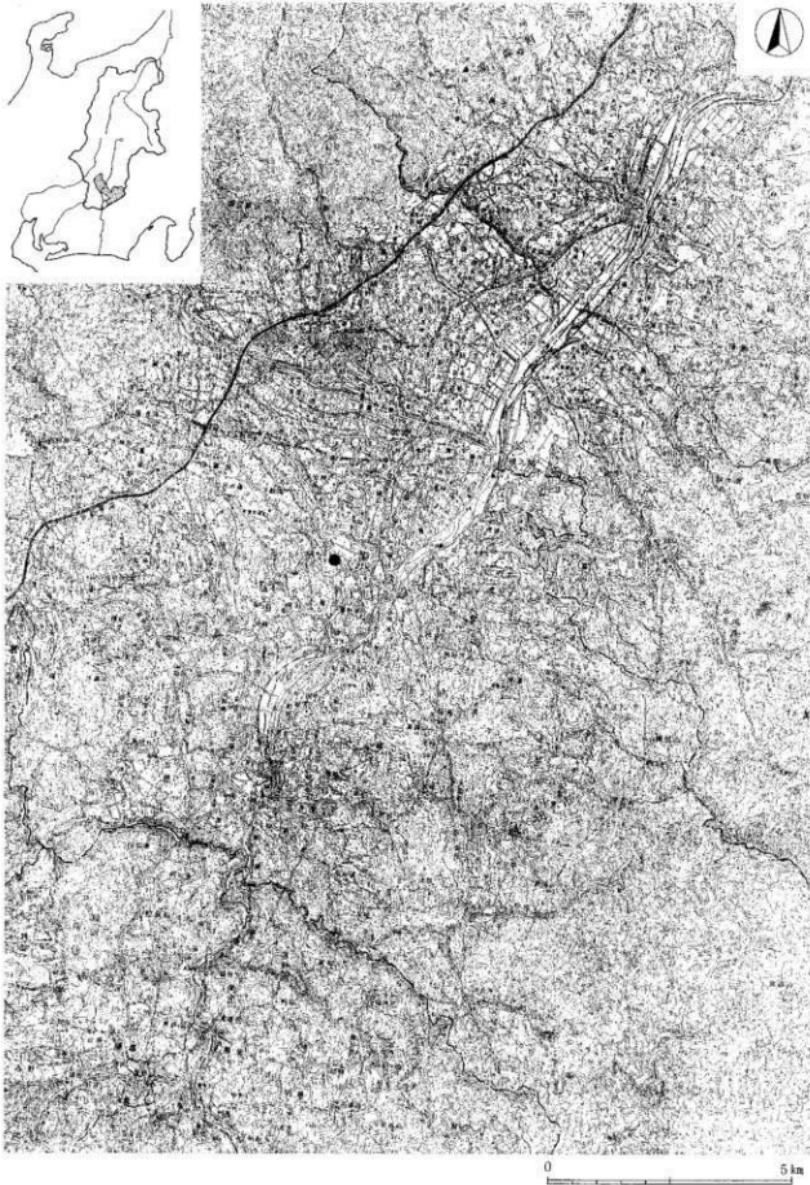
江戸時代では、天竜川の通船が重要な運送手段として利用されており、鶩流峠の出口として天竜川が緩やかに淀んでいる時又地籍に時又港が置かれた。物資の積み出しや対岸の龍江地区との渡船の港として栄えたが、明治時代以降の交通手段の変化や架橋により徐々に衰退していった。

このように、竜丘地区は良好な環境に恵まれて、古くより栄えた地区といえる。

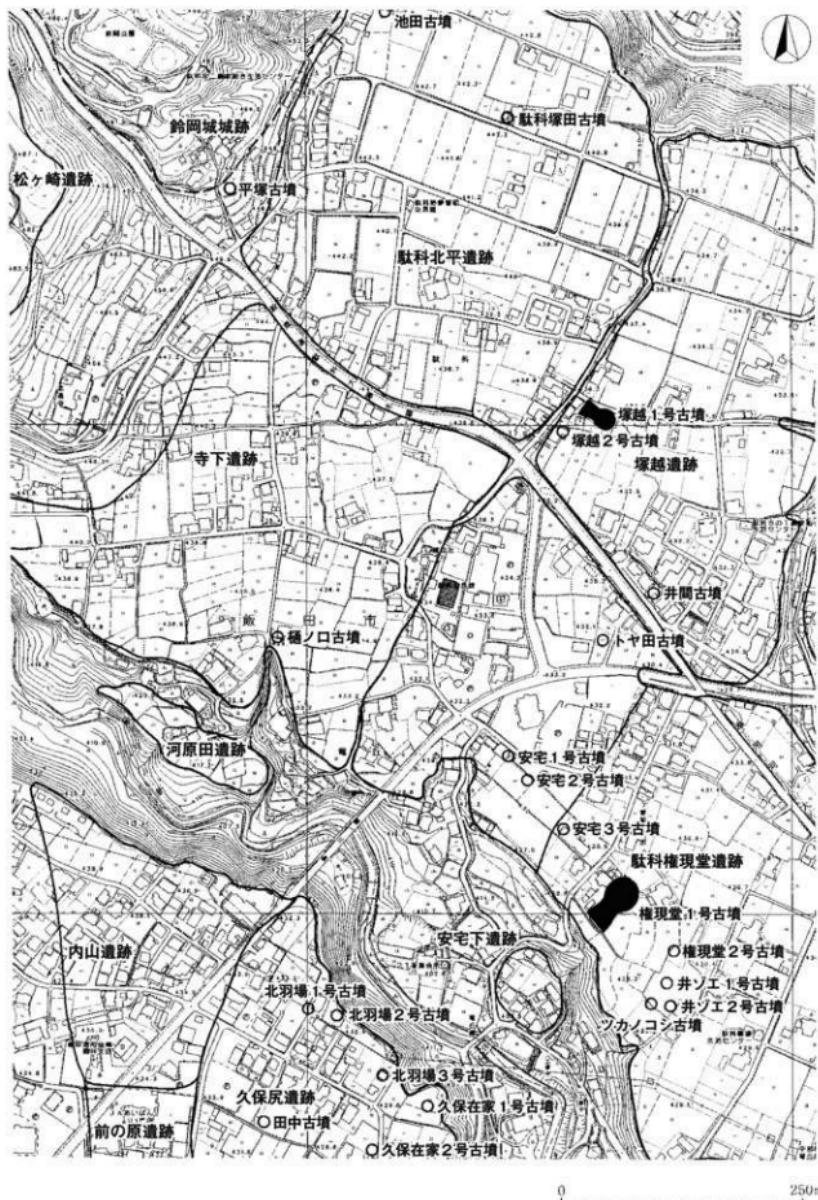
### 第3節 安宅遺跡の発掘調査

安宅遺跡の発掘調査について簡単に触れる。

遺跡の中央部を東・南西方向に緩やかに曲がる路線で、国道151号の改良工事が計画された。昭和43年度に、工事の実施に先立ち下伊那考古学会によって発掘調査が実施され、弥生時代・古墳時代・奈良時代の集落が調査された（下伊那考古学会 1969）。遺跡中央部から北に継断する路線で、県道駄科大瀬木線改良工事が計画された。平成4年度に工事に先立ち飯田市教育委員会により発掘調査が実施され、奈良・平安時代の居館跡等が調査された（飯田市教委 1995）。その他、発掘調査報告書は未刊行であるが、国道151号沿線周辺で昭和61年度・昭和63年度・平成7年度に民間開発による発掘調査が実施され、縄文時代・弥生時代・古墳時代の堅穴建物等が調査されている。こうした調査によって、安宅遺跡の広範囲にわたって、縄文時代～平安時代の集落や居館跡が広がっていることが分かってきた。今次調査区は県道調査地点から西に80m程離れた遺跡中央西端部に当たり、西側は寺下遺跡となる。



挿図1 遺跡の位置図（1：100,000）

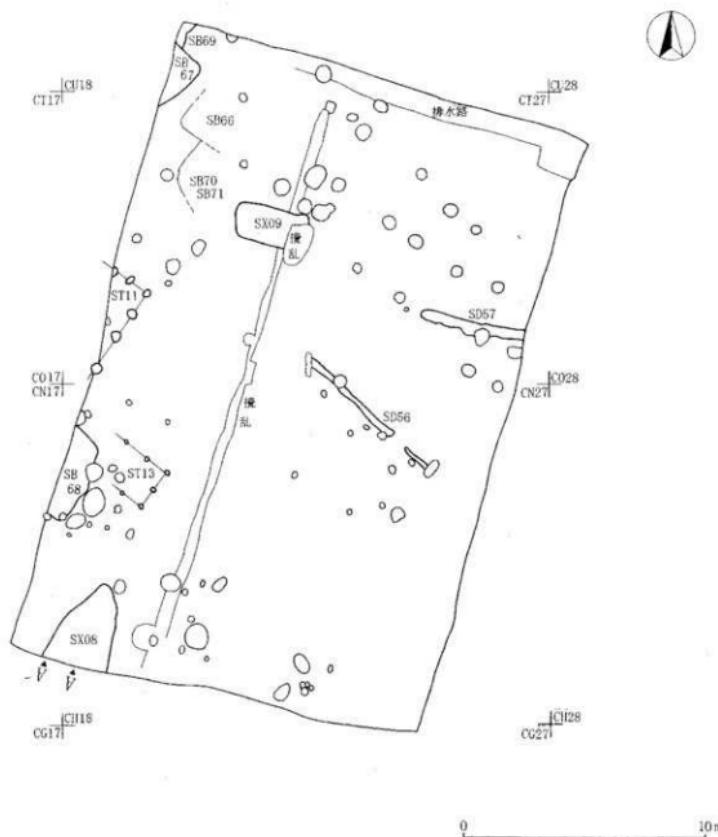


挿図2 調査位置及び周辺遺跡図 (1 : 5,000)

### 第Ⅲ章 調査結果

#### 第1節 調査区の設定

発掘調査位置は飯田市駄科1302番1号で、世界測地系を用いた飯田市新埋蔵文化財メッシュ図（飯田市教委 2009）による図面LC94-09-08に位置する。調査位置は駄科公民館の東隣接地で、小規模な公園として利用されていた。建物の建設範囲全面を対象として発掘調査を実施した。調査面積437m<sup>2</sup>である。



挿図3 調査全体図 (1:200)

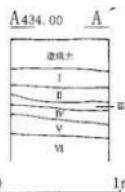
## 第2節 基本層序

調査区の基本層序については、調査区南壁のA-A'の箇所を選定して挿図4で示した。地表面からの土層は以下による。

- I層：2.5Y 6 / 1 黄灰色 砂壤土
- II層：2.5Y 6 / 2 黄灰色 砂壤土に10YR 6 / 8 明黄褐色 重埴土が混じる
- III層：N 6 / 灰色 砂土
- IV層：7.5YR 5 / 8 明褐色 稲質砂土に10YR 2 / 3 黒褐色 砂壤土が混じる
- V層：7.5YR 4 / 2 灰褐色 稲質砂土に7.5YR 5 / 6 明褐色 稲質砂土が混じる
- VI層：7.5YR 6 / 8 橙色 重埴土 地山

表土は公園整備時の造成土で、旧表土の上に盛り土されていた。I層・II層は旧水田耕土で、III層・IV層・V層は砂土もしくは壤質砂土が水平堆積する。

遺構確認面は地山のVI層上面で、この面から湧水がみられた。



挿図4 基本層序 (1 : 40)

## 第3節 遺構・遺物

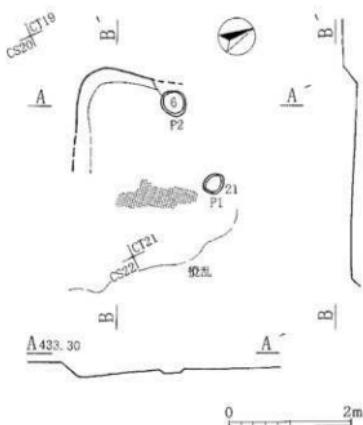
### (1) 竪穴建物

#### ① SB66 (挿図5・16・17)

調査区北西部のCT20・21で西隅と網点で示した貼り床を把握して竪穴建物とした。規模・主軸方向とも不明で、西隅付近の壁面を2.0m程調査した。SB70・71を切り、東側で攪乱を受ける。壁高は9~21cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は不良で、網点で示した部分以外はやや掘り過ぎた可能性がある。柱穴はP1・P2を検出したが、本遺構に付属するものかは確定できない。

出土遺物は土師器壺(16-1~9、17-1~2)・杯(17-3~4)・須恵器蓋(17-5~7)・糸切杯(17-8~11)・盤(17-12)・壺(17-13~14)・弥生土器壺(17-15)・打製石斧(19-1)がある。

出土遺物から奈良時代末葉~平安時時代(9世紀前後)に位置づけられる。



挿図5 SB66(1 : 80)

② SB67 (挿図6・17)

調査区北西端部のCU20で検出し、東隅付近を2.3m程度調査した。SB69を切り、大半は西側調査区外にかかる。隅丸の竪穴建物で、規模・主軸方向とも不明である。壁高は17~25cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。床面は軟らかくて不良で、柱穴は南東壁直下に確認されたが、役割などは不明である。

出土遺物は少なく、須恵器蓋(17-16)・高台杯(17-17)・糸切杯(17-18)、弥生土器壺(17-19)がある。

出土遺物から平安時代に位置づけられる。



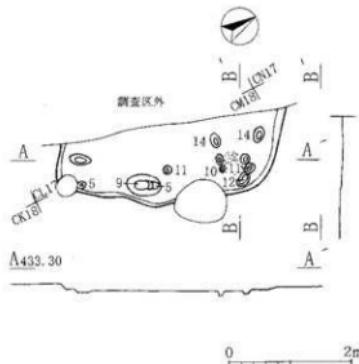
挿図6 SB67(1:80)

③ SB68 (挿図7・19)

調査区南西部CK・CL18で検出し、南東壁と東・南隅を調査した。西側が調査区外で、全体の1/2弱を調査した。北東・南西方向の長さが3.5mを測る隅丸方形の竪穴建物で、主軸方向は不明である。壁高は2~10cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面はたたき状に硬い貼り床で、東隅付近の床面上に焼土・炭が認められたが、カマドの痕跡とは考えられない。床面上に柱穴が確認されたが、本遺構に付属する可能性は低い。また、主柱穴は検出されなかった。

出土遺物は少なく、敲打器(19-2)1点のみが図化できた。他は、土師器片・須恵器片があり、前者が多い。

出土遺物から平安時代に位置づけられる。



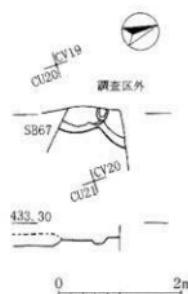
挿図7 SB68(1:80)

④ SB69 (挿図8・19)

調査区北隅CV20で検出し、東壁の一部を1.1m程度調査した。SB67に切られ、大半は西側用地外にかかる。規模・主軸方向とも不明で、壁高は7cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は軟らかくて不良で、柱穴は東壁直下に確認されたが、役割等は不明である。大半が調査区外にかかるため全体形が不明で、東壁が屈曲している。調査段階では竪穴建物としたが、別遺構の可能性も認められる。

出土遺物は少なく、弥生土器底片1点・打製石斧1点(19-3)、土師器片9点がある。

出土遺物から平安時代に位置づけられる。



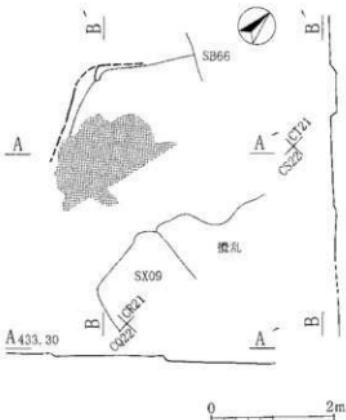
挿図8 SB69(1:80)

(5) SB70・71 (挿図9)

調査区北西部のCR・CS20で西隅と貼り床を検出して堅穴建物とした。調査段階では2棟の堅穴建物の重複としていたが、明確に平面形が把握できていないので一括して記述する。SB66・SX09・擾乱に切られる。規模・主軸方向とも不明で、壁高は10cmを測り、緩やかな壁面をなす。床面は網点で示した箇所が貼り床となるが、それ以外の箇所は掘りすぎた可能性がある。調査担当者は貼り床をSB71、北東壁をSB70と把握し、SB71がSB70を切ると把握した。カマド・柱穴は確認できなかった。

出土遺物は少なく、土師器片10点・須恵器片1点がある。

出土遺物から平安時代に位置づけられる。

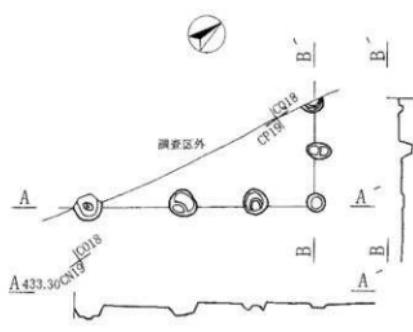


挿図9 SB70・71(1:80)

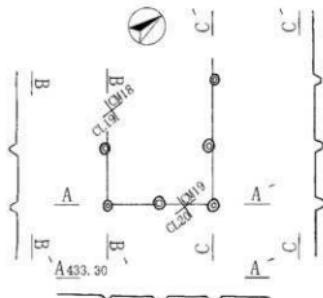
(2) 挖立柱建物

① ST11 (挿図10)

調査区中央西端部CP19を中心にして検出し、西側は調査区外となる。北東側3個・南東側4個の柱穴を縫形に検出して挖立柱建物と把握した。大半が調査区外のため、規模・桁行方向は不明となる。桁



ST11



ST13

挿図10 ST11・ST13(1:80)

行の柱間は一定でなく、北東側は0.9m、南東側は1.5・1.0mを測る。柱穴の掘り方の径は30~46cmで、深さは浅くて一定でない。

出土遺物はない。

## ② ST13 (挿図10)

調査区南西部CL19・CM19を中心にして柱穴6個がコの字形に並び掘立柱建物と把握した。梁行は2間で、桁行は2間以上と考えられるが、北西側の柱穴が検出できなかつたので不明となる。桁行方向はN54°Wを示す。柱穴の掘り方径は14~20cmで、深さは浅くて、6~13cmを測る。

出土遺物はない。

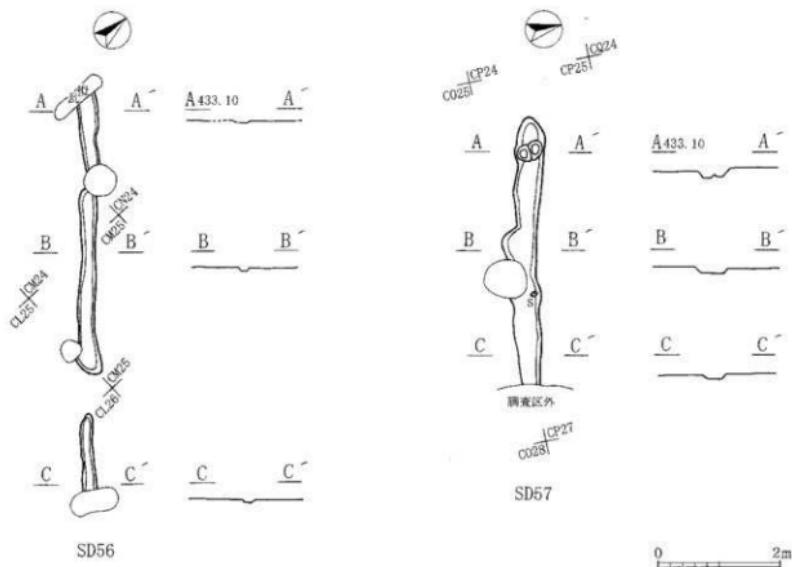
## (3) 溝

### ① SD56 (挿図11)

調査区中央部CN24からCL26にかけて検出し、柱穴に切られる。長さ4.6mを測り、途中で68cm途切れ、長軸方向はN50°Wを示す。土層は砂利の一層で、断面形は浅い逆台形をなす。底面は基本的に平坦であるが、水流で抉れた箇所がある。北西側・南東側に延長すると考えられるが、検出できなかつた。

出土遺物は土師器片16点がある。

遺構・土層の状況から、小規模な自然流路と把握される。



挿図11 SD56・SD57(1:80)

## ② SD57 (挿図11)

調査区北東端部CP25からCO27にかけて検出し、柱穴に切られる。長さ4.4mを測り、長軸方向はN78°Wを示す。土層は砂利の一層で、断面形は浅い逆台形をなす。底面は基本的に平坦であるが、水流で抉れた箇所がある。東側の調査区外に延び、西側に延長すると考えられるが、検出できなかった。

出土遺物は土師器片16点がある。

遺構・土層の状況から、小規模な自然流路と把握される。

## (4) その他

### ① SX08 (挿図12)

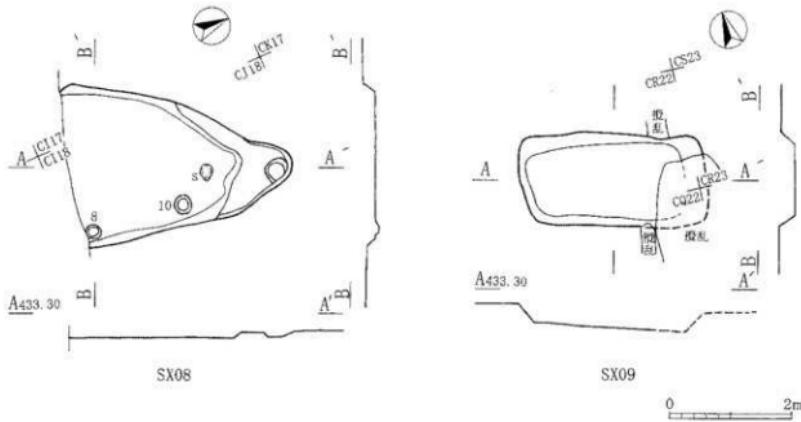
調査区南西端部CI18を中心にして検出し、南側が調査区外となる。東西方向の長さが2.6mを測り、平面形は不明である。壁高は11~23cmを測り、緩やかな壁面をなす。底面は平坦で穴が2箇所で確認され、北側がテラス状に段を持つ。

出土遺物は極めて少なく、土師器片2点がある。

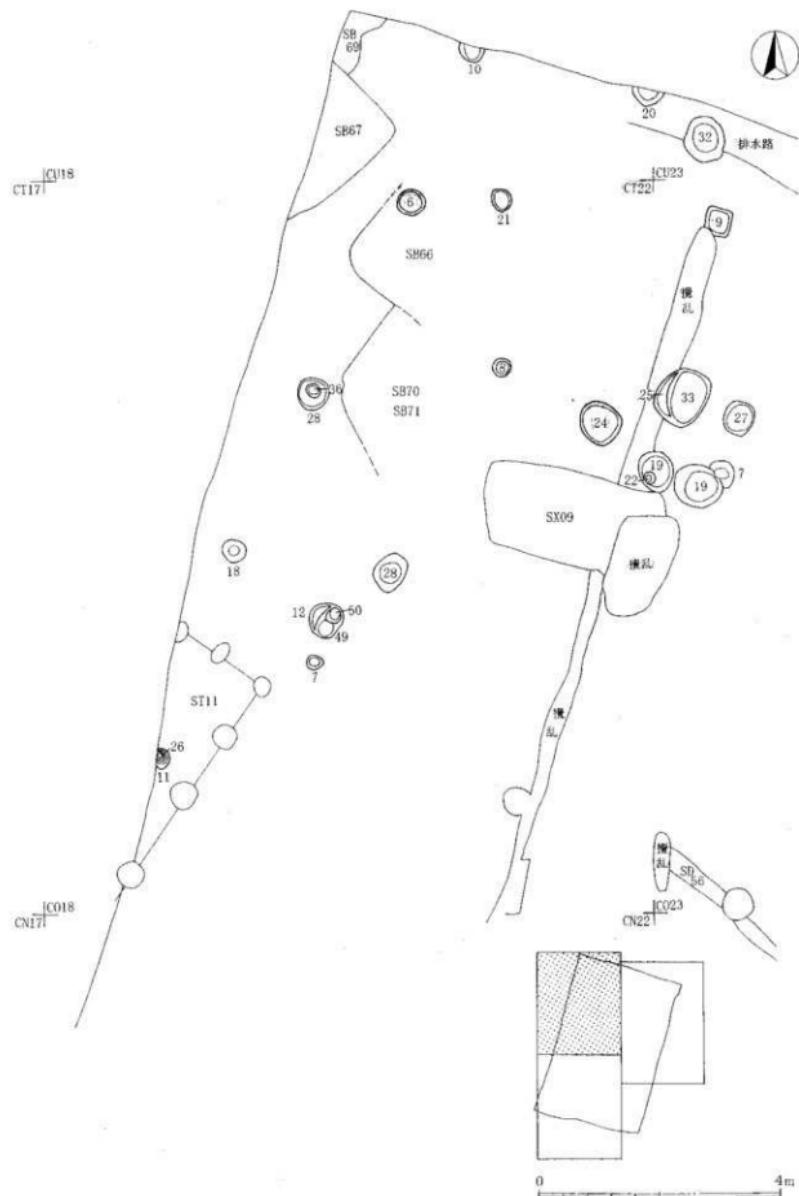
### ② SX09 (挿図12)

調査区北部CR22を中心にして検出し南東部が擾乱を受けている。1.5×3.0mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN80°Wを示す。壁高は22~35cmを測り、やや緩やかな壁面をなす。底面は平坦で、穴などは確認されなかった。

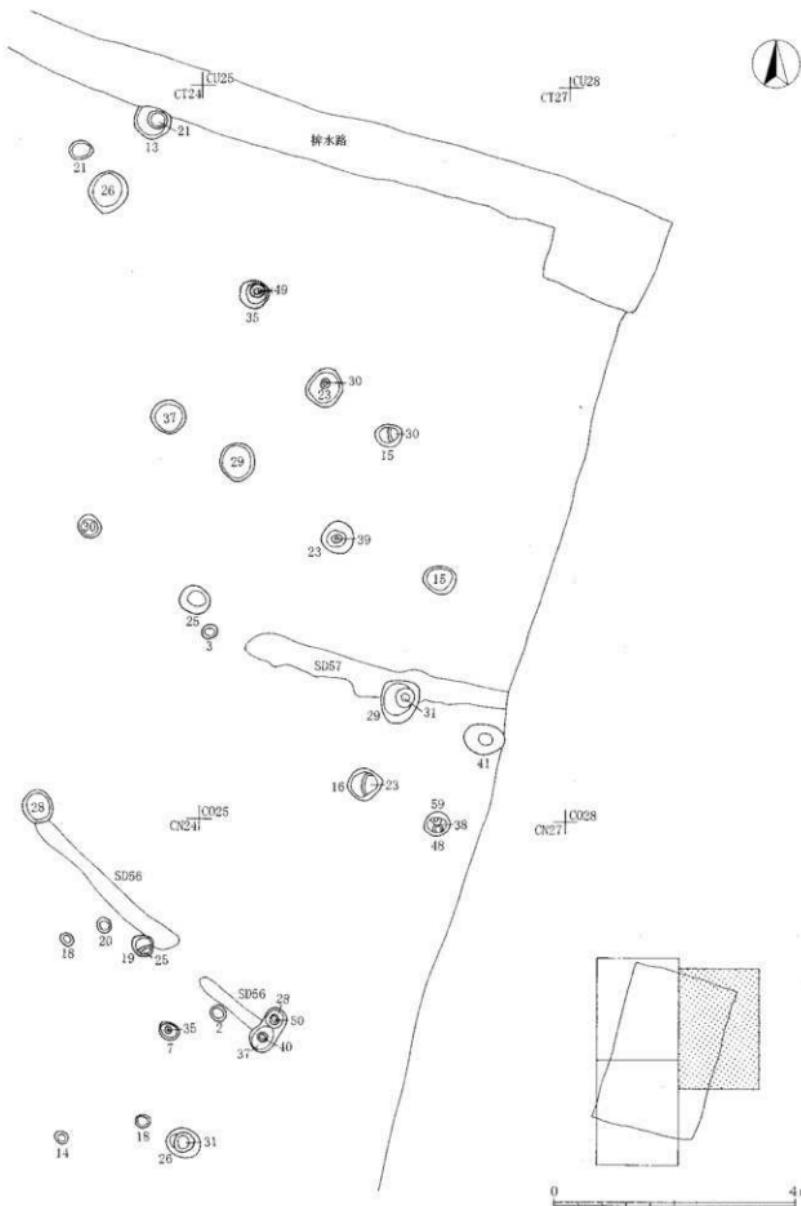
出土遺物は極めて少なく、弥生土器片1点・土師器片2点・須恵器片1点がある。



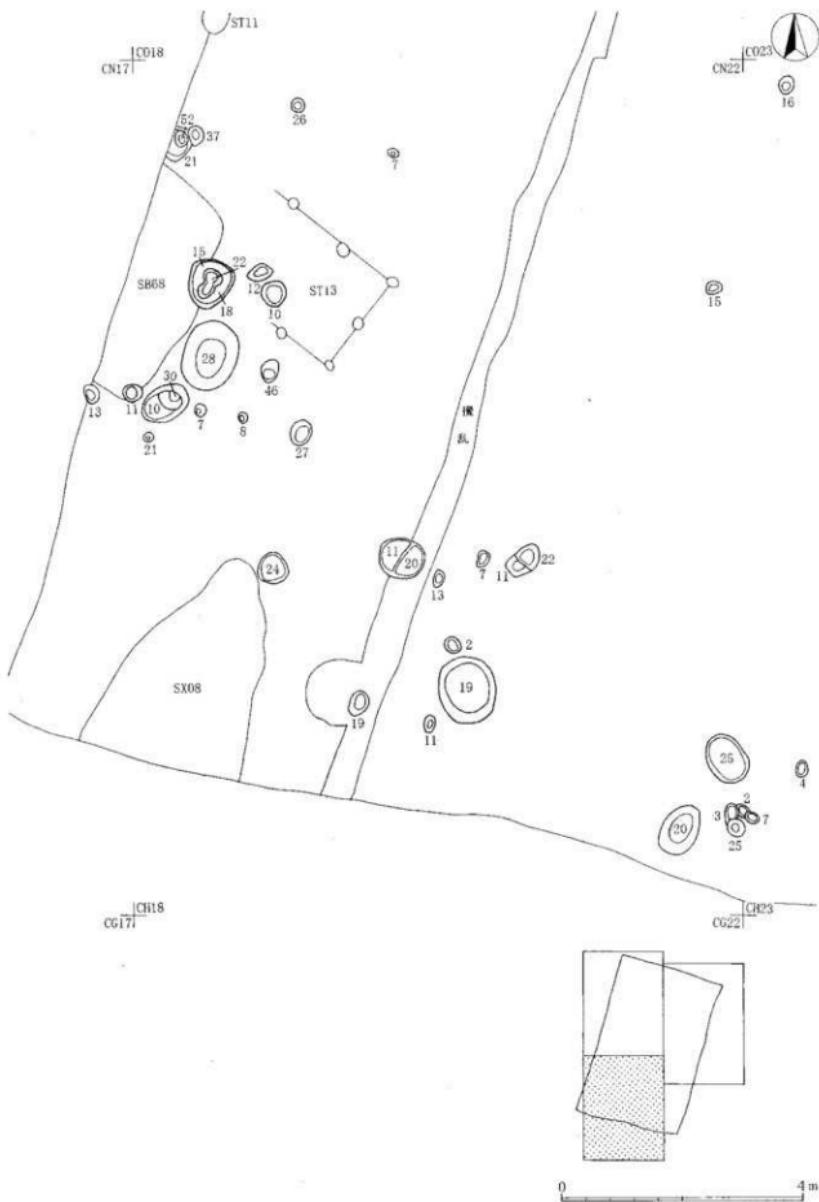
挿図12 SX08・SX09(1:80)



挿図13 柱穴・穴その1 (1 : 80)



挿図14 柱穴・穴その2 (1 : 80)



挿図15 柱穴・穴その3（1:80）

### (5) 柱穴・穴

柱穴・穴は調査区全体で検出され、挿図13～15で調査区を3図版に分割して示した。分布にはらつきがみられる。調査区北部では径50cm前後の柱穴が集中する。特に、SD57北西側の柱穴は総柱の掘立柱建物とも想定して図上で検討したが、並びにずれがあつて建物とは把握できなかつた。調査区中央部から南部にかけては、径20cm前後の柱穴が多く、空白箇所が認められる。その中で、径50cm前後の大きなものは、調査区南部に散在する。

CH22P 1 から土師器壺（17-20）、CP20P 1 から須恵器高杯（17-21）が出土した。

### (6) 遺構外出土遺物

CP18から出土した須恵器壺（17-22）、CQ21から出土した打製石斧（19-4）以外はすべて出土位置が明確でない遺構外出土遺物となる。土師器壺（17-23・24）・杯（17-25）、須恵器高台杯（17-26～30）・ヘラ切杯（18-1）・糸切杯（18-2～4）・壺（18-5～16）・壺（18-17）、灰釉陶器長頸壺（18-18）・椀（18-19・20）、常滑焼壺（18-21）、打製石斧（19-5）がある。ヘラ切杯（18-1）には「大」の刻書が認められた。

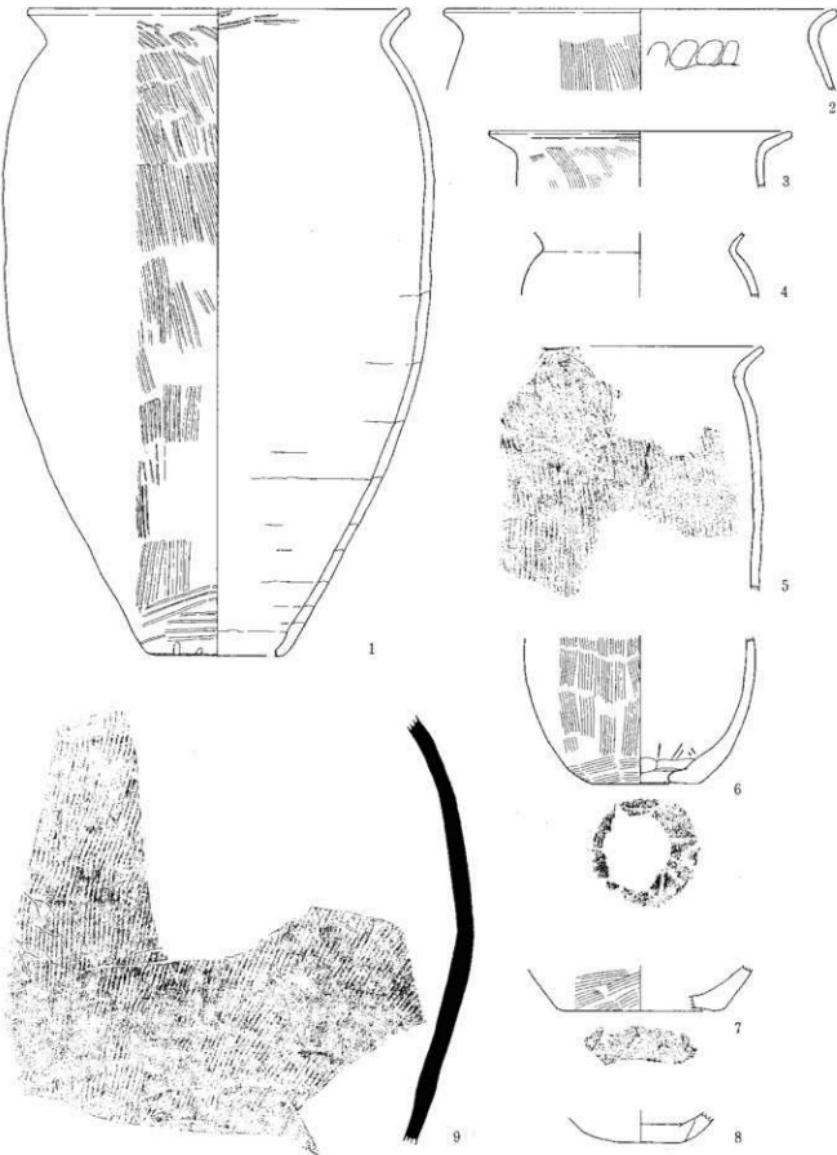


插图16 SB66出土土器 (1 : 3)

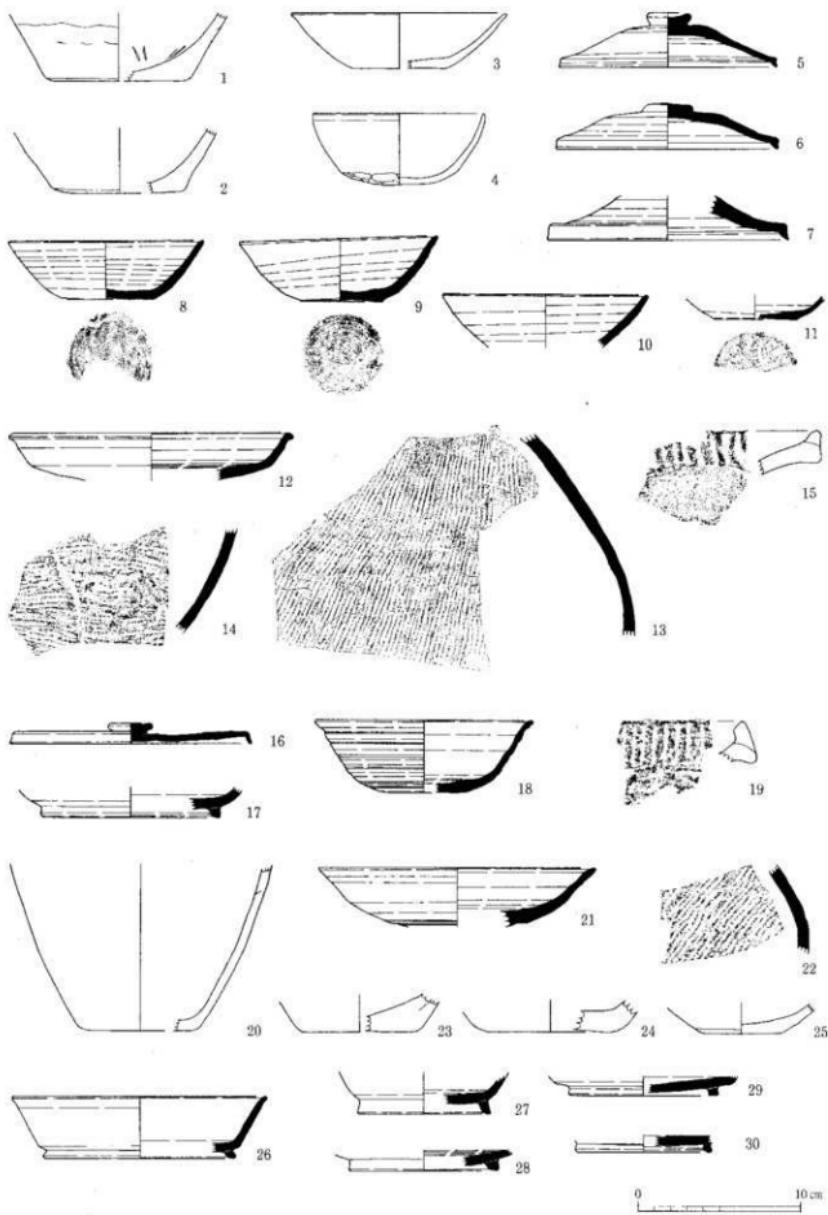
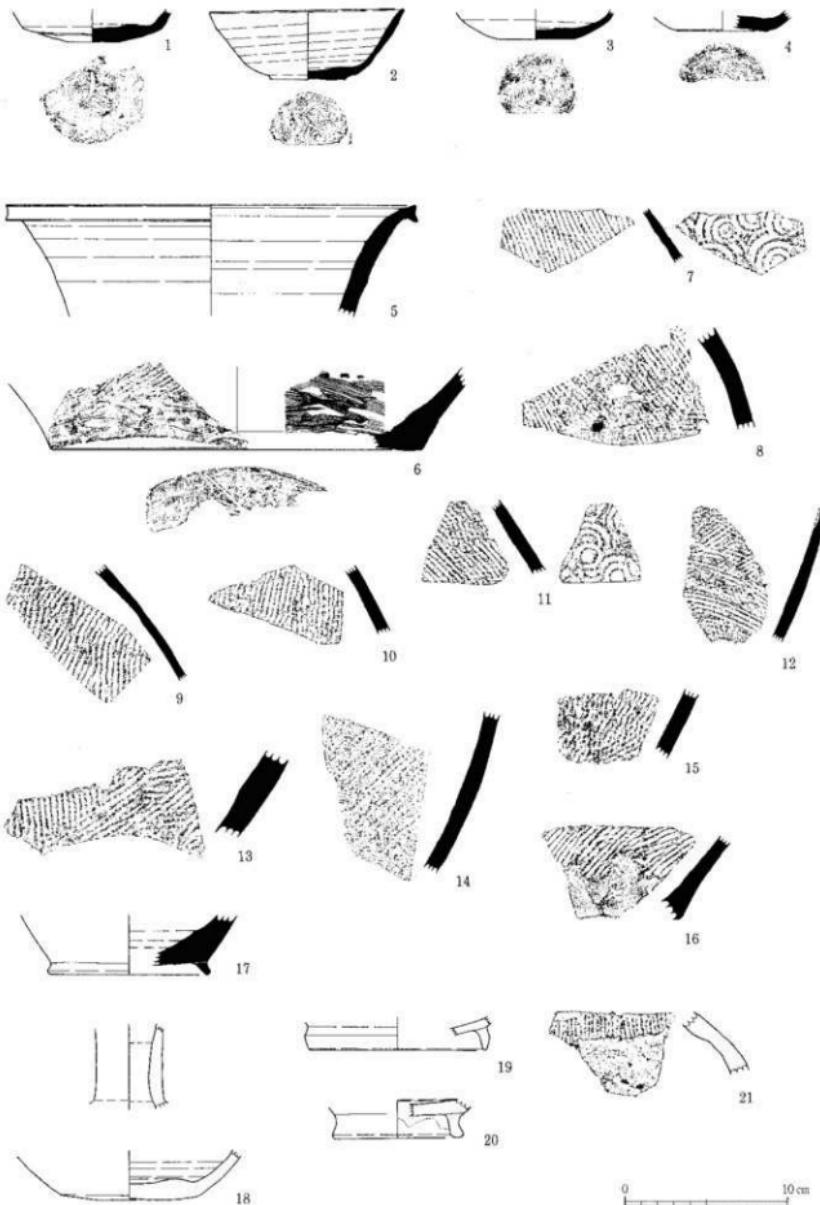
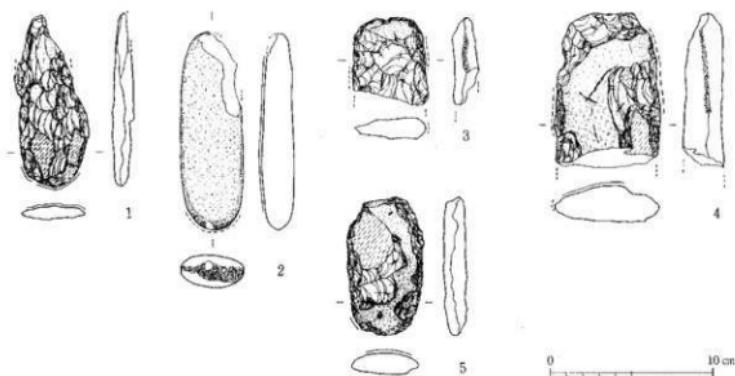


図17 SB66(1~14)・SB67(15~19)・柱穴(20・21)・遺構外(22~30)出土土器(1:3)



插図18 遺構外出土土器 (1 : 3)



挿図19 SB66(1)・SB68(2)・SB69(3)・遺構外(4・5)出土石器(1:3)

## 第Ⅳ章 まとめ

安宅遺跡が最初に調査されたのは昭和43年度で、それから4次にわたって調査が実施されており、今次調査は6次調査となる。発掘調査報告書刊行されているのは昭和43年度調査（下伊那考古学会 1969）と平成4年度調査（飯田市教委 1995）で、いずれも国道と県道の改良工事に伴うものである（以下国道調査区・県道調査区と呼称する）。前者は遺跡の中央部を横断し、後者は遺跡の中央部から北側へ縦断するもので、遺跡北半部の一端が明らかにされている。今次調査地は遺跡北西端部に当たり、平成4年度調査区から西に80m程離れている。両調査区等で得られた成果と照らし合わせることで、遺跡の状況が明らかになるといえる。ここでは、今次調査を主体として、周辺も含めて調査によって得られた成果・課題を指摘してまとめとする。

### 第1節 今次調査区の状況

#### (1) 遺構について

堅穴建物5棟・掘立柱建物2棟・溝2条・柱穴などが調査された。

堅穴建物は図化資料が出土したのがSB66・SB67のみで、他の堅穴建物は遺物の出土が極めて少なかった。両堅穴建物は、SB66の土師器壺の形態や食器の主体が須恵器高台杯・糸切杯であることから、奈良時代末葉～平安時代初頭の9世紀前後に位置づく。その他の堅穴建物の時期は不明であるが、破片資料の様相からみれば両堅穴建物とあまり時期差はないものと判断される。

SB66・SB70・SB71は重複している。調査者の所見に沿って3棟の堅穴建物として記述したが、壁面の検出が十分できなかったこともあって課題を残す。検出面で遺物が出土してその直下が床面と把握されているが、床面の見極めが難しかったため掘り過ぎの箇所も多いと考えられる。また、調査地点の他では堅穴建物が密集する状況ではなく、この箇所のみ3棟の堅穴建物が重複するのもやや不自然もある。出土土器をみると、SB66のみで比較的多量の図化資料があり、ほぼ9世紀前後の同一の時期となる。SB70・71には数点の破片資料しかない。SB70・SB71を1棟の堅穴建物と把握し、SB66も含めて2棟の堅穴建物が重複すると考えられる。

掘立柱建物はST11・13があり、出土遺物はない。ST13は柱穴掘り方の径が20cm以下であり、中世以降の可能性が高い。ST11は柱穴掘り方の径がやや大きく30～46cmであり、奈良・平安時代に置づく可能性も考えられる。その他柱穴等も調査されているが、掘立柱建物と把握できたものはない。しかし、調査区北部に柱穴が集中しており、把握できなかった掘立柱建物があったことも考えられる。

その他の遺構では、溝のSD56・SD57は一時的に流れた小規模な自然流路であり、SX08・SX09の役割は不明である。

以上の状況から、当該地は堅穴建物の時期をみて、奈良時代末葉～平安時代初頭（9世紀前後）の集落が広がっていると考えられる。当該地西側は後述するように豪族の居宅の範囲と想定されるので、西側が中心の集落域と考えられる。

## (2) 遺物について

出土遺物の概要是第Ⅲ章第3節で述べたとおりである。まとまった資料が出土したのがSB66・SB67のみであり、その他は遺構外の資料が比較的多い。

弥生時代の資料は後期の壺（18-15・19）と打製石斧（20-1・3-5）がある。明確な遺構は検出されなかったが、周辺には集落の存在も考えられる。

主体となるのは奈良・平安時代で、奈良時代末葉～平安時代初頭（9世紀前後）の資料が大半を占める。その中で、非クロ調整の土師器杯（18-4）、「大」の刻文のあるヘラ切杯（19-1）は、奈良時代（8世紀初頭～前葉）に位置づく。他に、土師器ロクロ調整杯（19-3）、灰釉陶器長頸壺（19-18）・椀（19-19・20）は、平安時代（9世紀後葉以降）と考えられる。

中世は常滑焼の甕片（19-21）があるが、小片のため詳細時期は不明である。

## 第2節 周辺調査の状況

### (1) 県道調査区の概要（平成4年度調査）

挿図20で調査位置（1:2,000）と遺構全体図（1:1,000）を示した。堅穴建物1棟・掘立柱建物8棟・柱列2・溝11条等が調査された。発掘調査報告書では、方向を揃えた掘立柱建物・柱列・溝等が相互に関連すると把握され、官衙もしくは豪族居館の付属施設的な性格が考えられた（飯田市教委 1995）。さらに『恒川遺跡群 総括編』（同 2013）では、時期不明の南側遺構群、奈良時代（8世紀前葉）の遺物が出土した中程の矩形を呈する溝・奈良時代～平安時代（8世紀後葉～9世紀）の溝・柱列等で構成される北側遺構群に分けた。北側遺構群は未報告の周辺調査の状況をふまえて、一辺60m強の溝や堀で囲まれた区画が存在すると指摘された。総体として、奈良時代～平安時代（8世紀～9世紀）の溝で囲まれた居住的性格の強い遺構群と把握された。

### (2) 国道調査区の概要（昭和43年度調査）

飯田・下伊那で緊急発掘調査が始まった初期段階の発掘調査で、遺跡中央部のB区、南西端部のC区に分かれ、国道の路線全面が調査できていない。弥生時代後期の堅穴建物8棟・古墳時代・奈良時代・平安時代の堅穴建物16棟等が調査された（下伊那考古学会 1969）。確認のみの堅穴建物も多く、出土遺物が提示された遺構も限定される。挿図20では、地形や国道の路線に合わせて調査区を当てはめ、全体図は堅穴建物のみを抽出して再トレースした。堅穴建物の時期は、弥生時代後期●、古墳時代後期▲、奈良・平安時代■として示した。印のないものは、報告書で土師器時代とされた古墳時代～平安時代のいずれの時期に位置づくと把握された堅穴建物である。その中では、奈良時代（8世紀前葉）の良好な資料が出土したB区H 6号堅穴建物が注目された。当該地には弥生時代後期・古墳時代後期・奈良・平安時代の集落が広がると把握された。なお、出土遺物の中に、古墳時代中期後葉の高坏があり、古墳時代は中期～後期の集落となる可能性が高い。

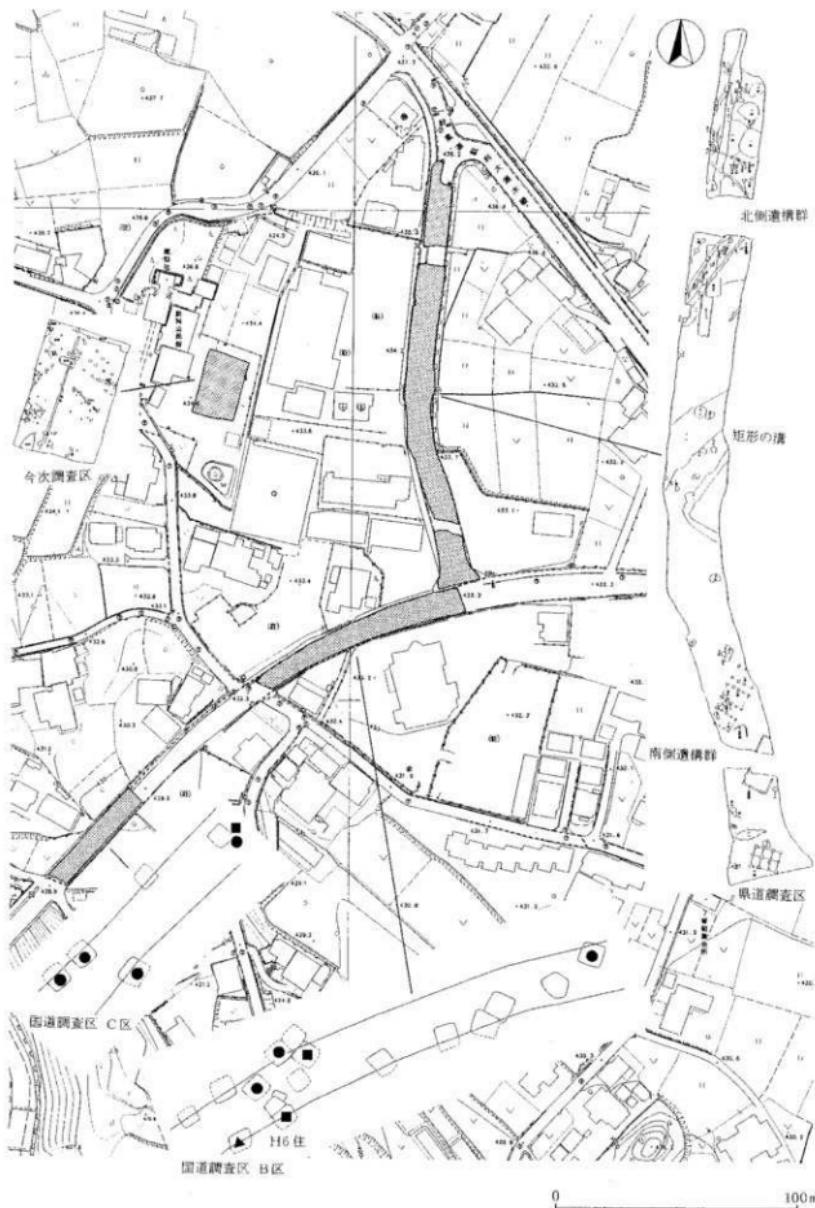


図20 周辺調査位置図

### 第3節 安宅遺跡の全体像

#### (1) 弥生時代

中心になるのが国道調査区で、後期の竪穴建物 8 棟が調査され、出土土器から後期後葉 3 棟・後期終末 1 棟・時期不明 4 棟と時期が細分できる。また、未報告であるが当該地南側の店舗建築に伴う調査でも該期の竪穴建物が調査されている。県道調査区では石器が比較的多く、今次調査区では土器・石器が少量出土したが、いずれも遺構は調査されていない。後期後葉～終末にかけての集落が、遺跡中央部から南・西側に広がると考えられる。

#### (2) 古墳時代

国道調査区で後期（6世紀）の竪穴建物 1 棟が調査されている。今次調査区・県道調査区では、遺構は検出されず、遺物もほとんど確認されなかった。国道調査区の南側には、前方後円墳の権現堂 1 号古墳や円墳の安宅 1・2・3 号古墳がある。古墳時代の集落の中心は遺跡中央部から南部で、南部から隣接する駄科権現堂遺跡北西部の範囲が権現堂 1 号古墳を中心とした墓域と考えられる。

#### (3) 奈良時代～平安時代

遺跡北中央部の県道調査区とその周辺に 8 世紀前葉～9 世紀の区画溝や塙で囲まれた豪族の居宅が広がる。時期毎の変遷や居宅内での建物等の役割の相違があると考えられるが、調査範囲が限定されており明確にはできない。その南側は、溝や掘立柱建物で構成されて竪穴建物は皆無である。豪族居宅の付属施設があったと考えられる。今次調査区は 9 世紀前後の竪穴建物 5 棟で構成され、区画用の施設は調査されなかった。国道調査区では、竪穴建物 1 棟が 8 世紀前葉に位置づき、その他は詳細時期不明である。両調査区は居宅の範囲外と考えられる。

以上の状況から、遺跡範囲の北中央部が豪族の居宅でその南側に付属施設があり、その周辺の南側・西側が 8 世紀～9 世紀の集落域と把握される。

今次調査も含めてこれまでの調査で得られた成果・課題を簡単に述べてきた。今次調査の報告含めて安宅遺跡の 3 地点の状況により、主に北半部の様相が少し明確にできた。ただし、国道・県道の沿線では、店舗・集合住宅建設による 3 件の発掘調査や 3 件の試掘調査が実施され、竪穴建物などが調査されている。その中で、国道の南側調査区 2 箇所で縄文時代中期の竪穴建物が調査されており、国道調査区でも土坑 1 基が調査されている。遺跡中央部から南部にかけて、該期の集落も広がることも明らかである。未報告となっている発掘調査の成果を速やかに公表し、安宅遺跡の全体像をより明確とするのが今後の課題といえる。

## 引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 1967 「鏡塚発掘調査報告書」  
飯田市教育委員会 1968 「内山・花の木発掘調査報告書」  
飯田市教育委員会 1974a 「小池・宮城・神送塚」  
飯田市教育委員会 1974b 「開善寺境内遺跡」  
飯田市教育委員会 1975 「前の原・塚原」  
飯田市教育委員会 1976 「駄科北平遺跡」  
飯田市教育委員会 1990a 「鉛岡城址」  
飯田市教育委員会 1990b 「前の原遺跡」  
飯田市教育委員会 1991a 「ガンドウ洞遺跡・飯田城跡」  
飯田市教育委員会 1991b 「開善寺境内遺跡」  
飯田市教育委員会 1995 「安宅遺跡」  
飯田市教育委員会 1996 「久保尻遺跡」  
飯田市教育委員会 1998 「内山遺跡」  
飯田市教育委員会 2001 「開善寺境内遺跡」  
飯田市教育委員会 2002a 「開善寺境内遺跡」  
飯田市教育委員会 2002b 「上の坊遺跡」  
飯田市教育委員会 2002c 「前の原遺跡IV」  
飯田市教育委員会 2003 「城陸遺跡」  
飯田市教育委員会 2005 「前林遺跡（付 前林廃寺跡）」  
飯田市教育委員会 2006 「駄科権現堂遺跡 安宅3号古墳」  
飯田市教育委員会 2007 「飯田における古墳の出現と展開」  
飯田市教育委員会 2013 「恒川遺跡群 総括編」  
下伊那考古学会 1969 「安宅・大鳥」  
下伊那地質誌編集委員会 1976 「下伊那の地質解説」  
岡田 正彦 2004 「考古学から見た飯伊地方の古代仏教文化」『飯田市美術博物館研究紀要』第14号  
岡田 正彦 2005 「飯田・下伊那地方の窯業の歴史」『飯田市美術博物館研究紀要』第15号



SB66・70・71(北西から)



SB66・70・71(北から)



SB67(南から)

図版2



SB68(南から)



SB69(南から)



ST11(南西から)



SD56(南東から)



SD57(東から)

図版4





図版6



調査区全景（南から）



調査区全景（北西から）





## 報告書抄録

ふりがな	あだかいせき							
書名	安宅遺跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
編著者名	山下 誠一							
編集機関	長野県飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 Tel 0265-22-4511 Fax 0265-22-7969							
発行年月日	2020年3月26日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○○.○	東経 ○○.○	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
安宅遺跡 あたけいせき	飯田市駄 科1302-1	20205	203	35° 28' 42"	137° 49' 46"	20110502 ～ 20110603	437m <sup>2</sup>	駄科区民 センター建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
安宅遺跡	集落跡 居宅跡	奈良・平安時代	竪穴建物 掘立柱建物 溝・柱穴	土師器・須恵器 灰釉陶器		豪族居宅周辺の集落跡		
要約	9世紀前後の竪穴建物6棟と同時期の可能性のある掘立柱建物1棟等を調査した。東側は豪族の居宅があると想定され、その周辺に広がる集落と把握した。							

あ　　だか　　遺　　跡

発行日 2020年3月26日

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534  
飯田市教育委員会

印刷・製本 飯田共同印刷株式会社



